

篠山市における灰小屋の現状と減少要因

Current situation and decreasing factors of the ash hut in Sasayama city

木村 昭義 丹羽 英之 中川 重年

Akiyoshi KIMURA, Hideyuki NIWA, Shigetoshi NAKAGAWA

Abstract: We investigated the current situation and decreasing factors of the ash hut in Sasayama city. The ash hut is a mud hut to make ash for the field fertilizer, estimated to be about 3,600 places in 1955 and it has been confirmed that it has decreased to 128 places in the 2006 survey. Based on that data, as a result of field survey and hearing conducted again in 2016 this time, it has decreased to 90 places. The factor of the decrease was found to be the influence of the field improvement that started from 1965, the conversion to agricultural fertilizer to chemical fertilizer, the change of the living environment due to the energy revolution. As many as 80% of the existing ash huts are left unused and 90% of the site of the ash hut which was removed is unused, and it is thought that the decrease will continue more and more in the future.

Keywords: the ash hut, agricultural field improvement project, regional recycling system

キーワード：灰小屋，圃場整備 地域循環型

1. 研究の背景と目的

高度成長期以降、日本の農業システムは機械的、化学的農業技術による高能率、高収益を目指す傾向が一般化し、機械化以前の農村地域の生活の中で利用されてきた施設が失われてきた¹⁾。失われてきた施設として、墓地²⁾、水車³⁾などが挙げられ、灰小屋もその一つである。灰小屋は、灰屋（はんや）、はいべや、はいや、あくなやと呼ばれる地域もあるが⁴⁾、本研究では灰小屋とする。一般的に灰小屋とは、間口四尺から一間、奥行き一間前後と比較的小型で、内壁を土や漆喰で塗り固めた泥小屋のことで、肥料などに用いていた貴重な灰を収納管理するために江戸時代より存在するといわれているが^{5) 6)}、篠山の灰小屋は、山の粗朶や藁などを灰小屋の中で焼き、灰を作って肥料として利用する地域循環型システムであることが特徴である^{7) 8) 9)}。その灰小屋が減少しているといわれているが、その実態については明らかになっていない。

そこで本研究では、篠山の灰小屋が消滅の危機にある中、現地踏査や、その存在を記憶する人へのヒアリングを行うことにより、灰小屋の変遷や現状、減少要因を明らかにすることを目的とした。

2. 調査方法

(1) 調査対象地

篠山市は、兵庫県中東部に位置し（図-1）、総面積 377.59 km²、人口 42,696 人（平成 28 年 9 月末現在）、気候は年較差、日較差ともに大きい内陸性気候で、この盆地特有の気候と肥沃な土壌は、多くの農作物を生み、農業は篠山市の基幹産業となっている¹⁰⁾。篠山市には、減少しつつあるが灰小屋が現存することから調査対象地に選定した。

(2) 灰小屋の現況

灰小屋に関心のある篠山市在住者が 4 年間調査し、灰小屋の位置を記録した地図（縮尺=1/10,000）を作成しており（以下、2006 年調査）、その地図上の灰小屋の位置を GIS データ化し、現地調査の基盤とした。2006 年調査は、灰小屋という地元の土を使った土



図-1 篠山市の位置

壁の小屋の調査を目的として、2003 年から 2006 年にかけて年に 1~2 回、1 回あたり 2~3 日かけて 2 人体制で行われた。踏査による発見と寄せられた灰小屋の残存情報による確認により灰小屋の位置が記録された。調査範囲は、篠山市全域であった。

2006 年調査の結果を検証するために、2015 年から著者により全ての記録されていた灰小屋の現地調査を実施した。現地調査では、2006 年調査で記録された灰小屋の周辺約 50m を探索し灰小屋の有無を確認し、灰小屋が現存した場合はその状況を調査した。灰小屋の変遷と利用実態を明らかにするために、まず利用または放置に区分した。利用されている場合は、灰小屋として利用されているのか、放置されている場合は、放置されてからの時間を推測するために灰小屋が崩壊しているかを区分し、崩壊、放置、何らかの用途に利用、灰小屋として利用の 4 つに分類した。崩壊は灰小屋の屋根や壁の一部が崩れている状況、放置は崩れることなく形は残っているが小屋の中は廃材や使われなくなったと思われる道具など

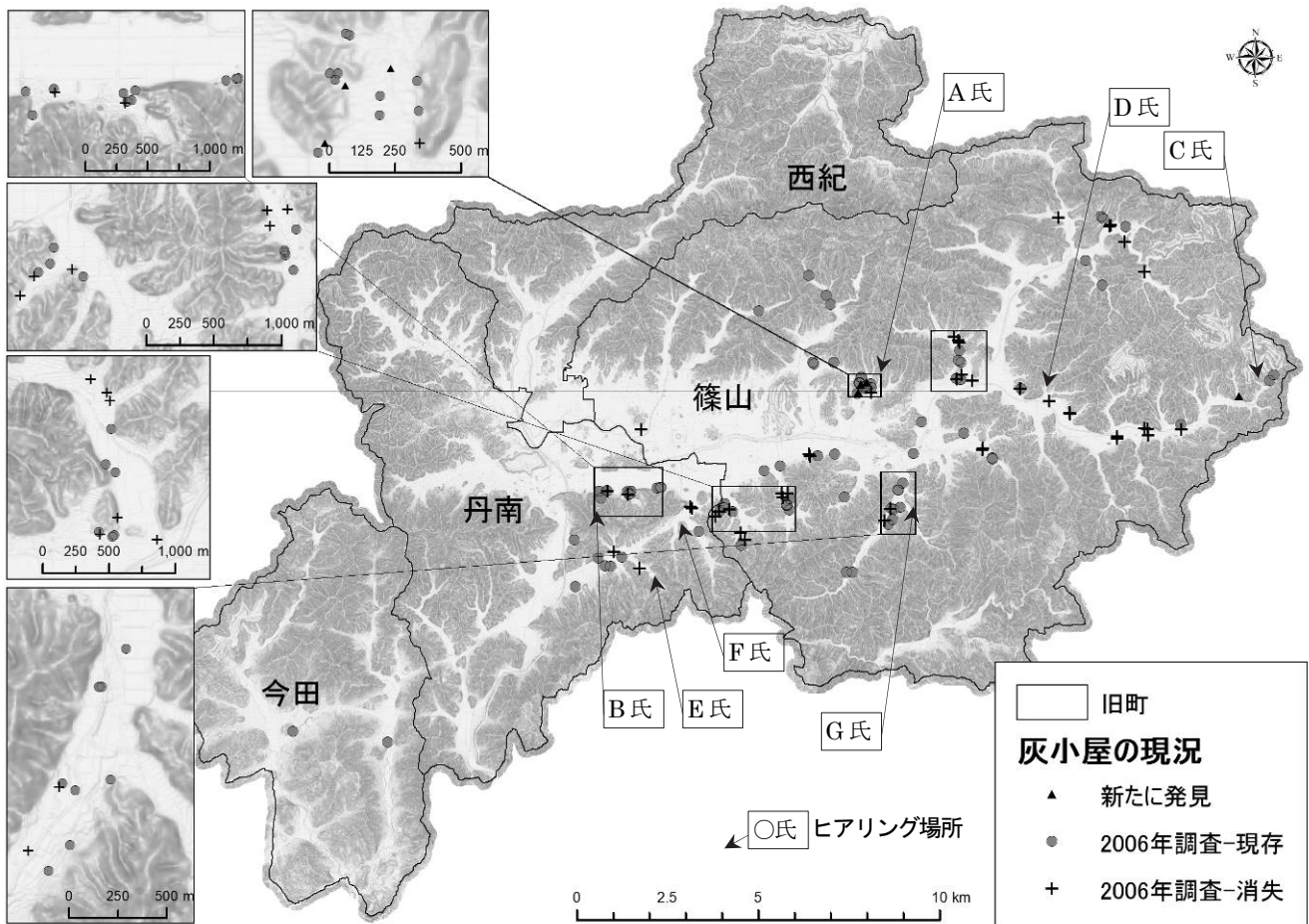


図-2 灰小屋の現況

が放置された状況、何らかの用途に利用は補修や清掃の痕跡があり道具や肥料などの保管庫になっている状況、灰小屋として利用は小屋のまわりに灰を作るための材料である柴や藁、乾燥させた土などが置かれ、灰を作った痕跡が確認できる状態とした。灰小屋が消失していた場合は跡地の状況を調査した。灰小屋が撤去された意図を推測するために、跡地の状況を、未利用、整地されているに区分した。

(3) 灰小屋の過去

現況とあわせ灰小屋の変遷と減少要因を推測するために、ヒアリング調査を行った。現況確認時に、灰小屋の周辺で出会った人を対象に30分程度の対面調査を行った。圃場整備以前の灰小屋の状況を記憶している可能性の高い、見た目80歳前後で現在も農業に携わっている高齢者を選定した。2015年5月から2017年6月にかけて行い、灰小屋の昔の用途、変遷、減少理由について聞き取った。また、灰小屋に詳しいと紹介された高齢者を個別訪問し、1時間程度と同じ内容の対面調査を実施した。

3. 結果

(1) 灰小屋の現況

2006年調査では篠山市の南部を中心に128箇所、灰小屋が記録されており、今回の調査では、そのうち84箇所が現存し、44箇所が消失していることが分かった。2006年調査で記録されていなかった灰小屋を6箇所発見したので、現存している灰小屋は90箇所であった(図-2)。農地の中央にある灰小屋は少なく、多くは農地周辺の山裾に分布していた。分布地域には偏りがあり、篠山市合併前の旧4町に分割すると、旧篠山町68箇所、旧丹南町18箇所、旧今田町4箇所、旧西紀町0箇所であり、多くが篠山市南部の旧篠山町に分布していた。



写真-1 現存する灰小屋(灰小屋として利用)



写真-2 現存する灰小屋(何らかの用途に利用)

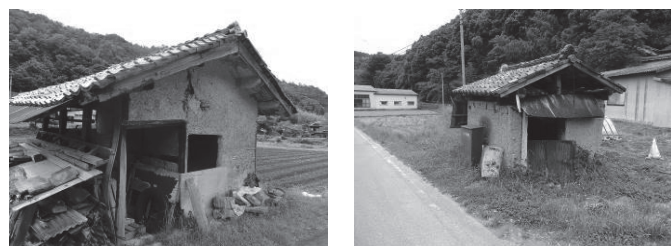


写真-3 現存する灰小屋(放置)

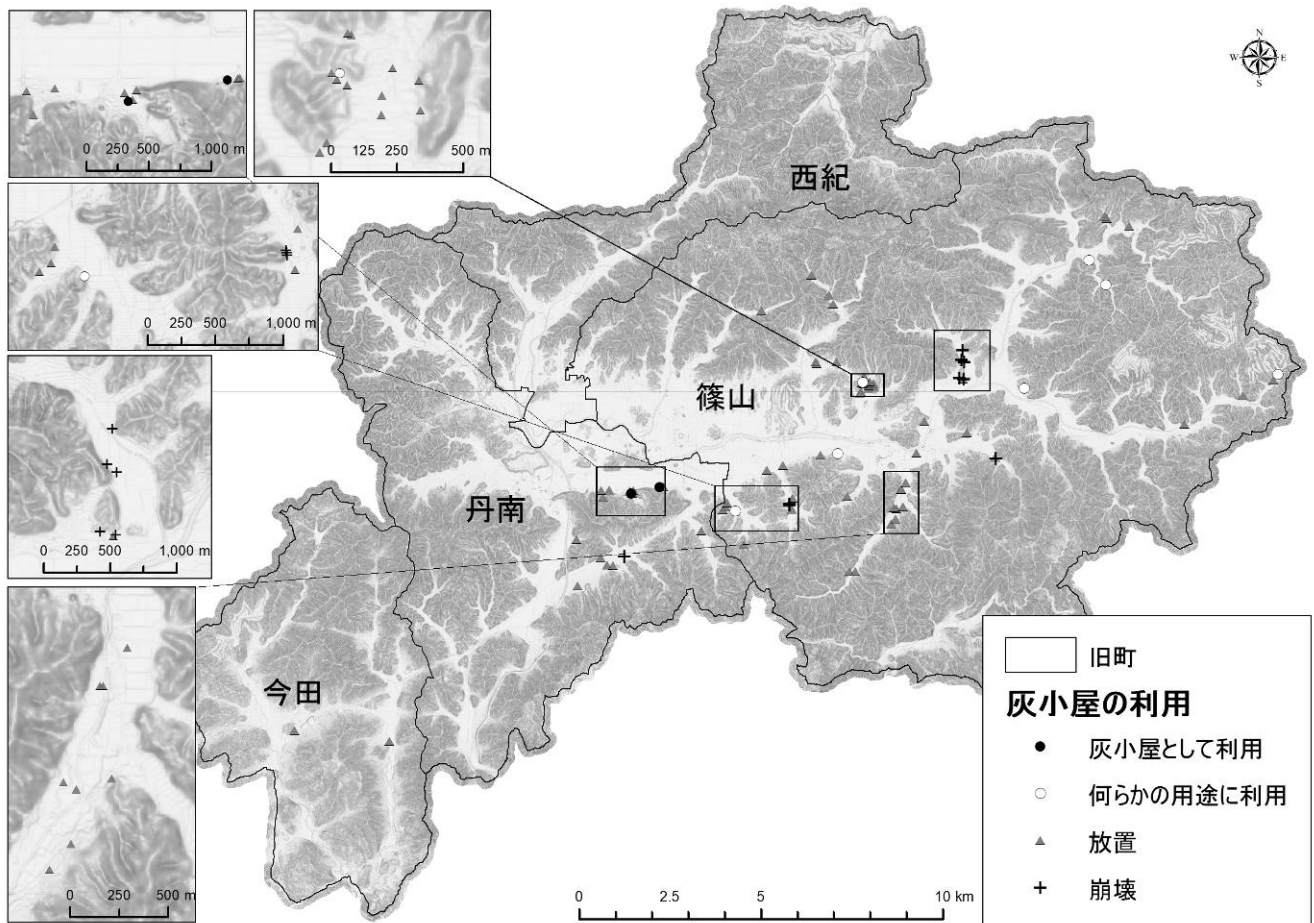


図-3 灰小屋の利用

現存する灰小屋90箇所のうち、灰小屋として利用2箇所(写真-1)、何らかの用途に利用8箇所(写真-2)、放置70箇所(写真-3)、崩壊10箇所(写真-4)であった(図-3)。灰小屋が消失した跡地の利用は、未利用が39箇所(写真-5)、整地が5箇所(写真-6)であった。

(2) 灰小屋の過去

現地調査での調査対象者は、70歳代の男性4名と女性1名、80歳代の男性3名と女性4名で、聞き取りをした集落はすべて異なっていた(図-2)。また、個別訪問での調査対象者は、70歳代の男性2名と80歳代男性1名であった。聞き取った内容を項目ごとにまとめた。

1) 灰小屋の昔の用途

篠山市の灰小屋では、山林の粗朶や藁、乾燥させた土を何重にも積み重ね3日程度蒸し焼きにし、肥料となる灰を作製する。灰小屋は、山裾や田の中央、家の近くにも建てられ、同じ方法で灰を作り田や畑、畦豆に施肥した。道具置き場や休憩所などとしても利用した。

個別の主なヒアリング結果は次の通りである。

(A氏:2015年10月,87歳男性) 灰小屋の中で藁や柴を燃やして灰をつくり、肥料として田や畑に鋤き込む。畑に使用することが多く、作物の成長がはやく甘味が出るとともに、病虫害が少なくなった。

(B氏:2016年12月,85歳男性) 農地の中央や山裾に建てられた灰小屋は休憩所としても利用していた。灰を焼くとき以外は、そこで休み、昼食をとり、冬に暖をとり、道具の仮置き場などに使っていた。

2) 灰小屋の変遷

87歳の男性が曾祖父の時代には存在したと証言したことから、

灰小屋は明治後期には存在していた。昭和30年代には各農家に一つあったと言われるほど、多くの灰小屋が存在していた。

個別の主なヒアリング内容は次の通りである。

(A氏:2015年10月,87歳男性) 灰小屋は自分が若い頃から存在し、実際に灰を作っていた。灰小屋は曾祖父の代からあったと聞いている。

(C氏:2017年,80歳代女性) 灰小屋は昭和31年には各農家に1つはあった。灰小屋は裕福な農家には2つ以上あった。

(D氏:2016年12月,75歳男性) かつては多くの灰小屋が並び、はんや街道と呼ばれていた。

(E氏:2016年8月,70歳代女性) 昔は田んぼやその周りに、たくさん灰小屋があり生活風景の一部となっていた。田んぼの畦に沿って灰小屋が七つ並び、地域では七灰屋(ひちはんや)と呼ばれていた。

3) 灰小屋の減少理由

灰小屋の減少理由は、昭和40年代からの圃場整備だと証言する人が多かった。

個別の主なヒアリング内容は次の通りである。

(F氏:2016年5月,87歳女性) 昭和40年代の圃場整備で、田畑にあった灰小屋はほとんどが消失した。

(C氏:2017年,80歳代女性) 昭和42~43年の圃場整備や、昭和45~46年の暗渠敷設工事でほとんどが壊され、灰小屋に併設された道具小屋なども取り壊された。水車などもあったが消失していった。

(G氏:2016年12月,70歳代男性) 化学肥料が普及したことにより、木灰を肥料として利用しなくなり、灰小屋で灰を焼く農家が激減した。

4. 考察

(1) 灰小屋の変遷と現況

灰小屋は明治時代後半には存在していたと推測される。昭和31年には各農家に1戸はあったとのヒアリング結果をもとに、当時の灰小屋の数を推測した。2006年調査では、灰小屋が旧篠山町域に多く分布していたことから、旧篠山町の昭和30年の農家件数3,590件から推測すると、旧篠山町では約3,600箇所の灰小屋があったと推測される。旧篠山町の集落数は現在155であることから、1集落当たり23箇所くらいの灰小屋があったことになる。ヒアリングの回答の中に、多くの灰小屋が並び、はんや街道と呼ばれていた、田畑の間に灰小屋が7つ隣接して立ち並ぶ様子をもって七灰屋（しちはんや）と呼ばれていたとの証言があることから、1集落当たり23箇所程度の灰小屋があったとの推測は過大な数ではないと考えられる。

一方、2006年調査において現存した灰小屋は128箇所であり、2006年時点で大部分の灰小屋が消失していたと考えられる。さらに、2006年調査から今回調査の間に約30%が消失していることから、わずかに残った灰小屋の減少が続いていることがわかった。現存する灰小屋のうち、何らかの用途や灰小屋として利用されているものは約10%、残り約90%は崩壊または放置であり、今後篠山市から灰小屋が完全に消失する可能性が極めて高いと考えられる。

(2) 灰小屋の減少要因

ヒアリングの回答では、特に平地の田畑にあった灰小屋を中心に圃場整備により消失したとされており、2006年調査で記録された灰小屋は山裾に分布するものが多いことから（図-2）、篠山市の灰小屋は、昭和40年代からの圃場整備推進¹¹⁾により消失したと考えられる。

一方、篠山市では灰小屋が木灰をつくるための小屋として使われてきたことから、化学肥料の普及により、肥料としての木灰を使う必要がなくなり、灰小屋で灰を焼く農家が減少したと考えられる。同時に1960年代の燃料革命により、山に入って薪や柴を集める生活が消えて、灰を焼くための材料の1つである薪や柴を集めなくなったことも灰小屋で灰を焼く農家が減少した一因だと考えられる。また、2006年調査以降に消失した灰小屋44箇所のうち、跡地が整地されているのは6箇所だけであることから、灰小屋の多くは土地の用途転換が目的ではなく、灰小屋としての機能が不要になったため消失したと考えられる。実際に、現存する灰小屋のうち木灰をつくるために利用されているのは、わずか2箇所だけである。

5. まとめ

木灰をつくるための小屋として独特の使われ方をしてきた篠山市の灰小屋は、近い将来に完全に消失する可能性が極めて高い。安価な化学肥料の普及により日本の農業が変容してきた^{12) 13)}なかで、灰小屋で藁や柴を燃やして灰をつくり、肥料として田や畑に鋤き込む方法は地域循環型のシステムとして捉えることができる。地球環境問題において窒素循環が危機的な状況にあるとされるなか¹⁴⁾、地域循環型のシステムとして灰小屋の詳細を消滅する前に記録として残すことの意義は大きい。

謝辞：灰小屋の過去を記録に残すため、ヒアリング調査にご協力頂いた篠山市在住の皆様方には、心より感謝申し上げます。

補注及び引用文献

- 1) 山本正三 (2000)：最近における農業・農村地域の変化に関する研究の一視点：地理学評論 73 (3), 147-160
- 2) 長堀金造・赤江剛夫・大田征六 (1994)：圃場整備における墓地移転の



写真-4 現存する灰小屋（崩壊）



写真-5 灰小屋消失後の跡地利用（未利用）草地になっている



写真-6 灰小屋消失後の跡地利用（整地）

事例的研究：岡山大学農学部学術報告 (83), 27-34

- 3) 廣瀬祐一 (2007)：揚水水車が継続的に灌漑利用される要因解明：農業・農村工芸大学綱要集, 416-417
- 4) 大野沙織 (2013)：滋賀県における灰小屋に関する研究：日本建築学会大会学術講演梗概集, 205-206
- 5) 日本民族大辞典(下) (2000)：吉川弘文館, 337
- 6) 吉田純一(1987)：報徳仕法における家屋普請について：福井工業大学研究紀要(17), 141-152
- 7) 河合雅雄 (2009)：動物たちの反乱：PHPサイエンス・ワールド新書, 26-54
- 8) 斎藤暖生 (2005)：山菜の採取地としてのエコトーン：国立歴史民俗博物館研究報告, 329
- 9) 畑中久美子 (2006)：参加型の「伝統建造物復元による地域づくりへの試み」：日本建築学会大会学術講演梗概集, 639-640
- 10) 篠山市統計資料 (2016)：篠山市, 1-16
- 11) 山田正男 (1983)：篠山町百年史：兵庫県篠山町, 115-197
- 12) 西尾道徳 (2001)：日本における化学肥料消費の動向と問題点：二本土壌肥料学雑誌 (73), 219-225
- 13) 高橋英一 (1984)：肥料の歴史：化学と生物 (22), 671-673
- 14) Rockstrom, J., Steffen, W., Noone, K., Persson, A., Chapin, F. S., Lambin, E. F., Lenton, T. M., Scheffer, M., Folke, C., Schellnhuber, H. J., Nykvist, B., Dewit, C. A., Hughes, T., Leeuw, S. V., Rodhe, H., Sorlin, S., Snyder, P. K., Costanza, R., Svedin, U., Falkenmark, M., Karlberg, L., Corell, R. W., Fabry, V. J., Hansen, J., Walker, B., Liverman, D., Richardson, K., Crutzen, P., Foley, J. A. (2009)：A safe operating space for humanity：Nature, 461 (7263), 472-475